5月園だより

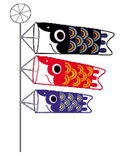
２０１７年度　年主題〈愛されて育つ〉

1･2歳児５月主題「きづく」

月のねがい

◎神さまが創られた花や虫にふれる
◎保育室の遊具に気づき、保育者のそばで遊びを楽しむ
◎ひとり一人の生活リズムの中で過ごす
◎保育者に思いや甘えを受けとめてもらう

3･4･5歳児５月主題　「見つける」



月のねがい

◎聖書のお話を聞いたり、さんびかを歌う
◎気に入った場所や遊具が見つかる
◎春の自然にふれて親しみをもち遊ぶ
◎自分の気持ちや気づいたことを身近な人に伝えようとする

今月の聖句　「いつまでものこるものは信仰と希望と愛です。」

Ⅰコリント 13:13

今月のテーマは「信・望・愛」です。私達の人生で常に考えるべきテーマです。

①「信」は天地創造の父なる神への敬愛。地上に受肉し、人類の罪の身代わりとなって十字架に死んでくださり、復活して人類から「死」の恐怖を取り除き、永遠のいのちへの道を完成した子なるキリストへの信頼。②「望」は神の国への希望。天国、極楽への希望。③「愛」は憎しみあう世、奪い合う世、殺し合う戦争の世を完全に捨てて、平和と友好の世を創るべく、互いに「愛し合う」事。同章に愛の教えが具体的に記されているので引用します。**「愛は忍耐強い、情け深い、妬まない。自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、苛立たず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真理を喜ぶ。すべてを信じ、全てを望み、全てに絶える。」**（同章４節～６節）

夫婦関係、親子関係、ご近所との人間関係、市民として、日本の国民として、世界の人類として、以上のことが実行できれば、この世は即**天国、極楽**に変わります。「愛」のことを、昔の人は「ご大切」と表現しました。互いに他人を自分より偉い者と思いましょう。原典では「愛」のことをアガペー（神の愛、母の愛の意）という言語を使っています。日本語でエロス（異性愛）、ストルゲー（愛国）という表現に、いずれも「愛」と訳していますが、厳密にはアガペー、エロス、ストルゲーは峻別すべきです。とはいえ、「愛の実行」は中々実行できない場合が多いものです。自我が優先してしまいます。そのような時は、まずは父なる神に祈って下さい。**「神よ、愛の無い我を助け給え」**と。そうすれば、神は**聖霊**を送って、必ず助けてくださいます。父と子と聖霊なる神（三位一体の神）はあなたと人類を愛（アガペー）しています。

前理事長　池田公栄

5月の行事予定

8 日～	家庭訪問（３才以上）
10 日（水）	誕生会（4･5 月生まれ）
11 日（木）	弁当日
20 日（土）	親子遠足・父母会総会
23 日（火）	尿検査（３才以上）
27 日（土）	誕生会（めぐみ組）
30 日（火）	内科検診（３才以上）
31 日（水）	内科検診（０～２才児）

6月の行事予定

3 日（土）	家族の日参観（３才以上）
9 日（金）	歯科検診（全園児）
13 日（火）	給食試食会（あい組）
15 日（木）	給食試食会（のぞみ組）
21 日（水）	海遊び・弁当日
29 日（木）	誕生会（6･7･8 月生まれ）

ゆっくりタイムの進め

3月の参観日の時、あるお母さんが教えてくださったお話です。「我が家は、自分も仕事があり、中学生、小学生そしてこども園と3人の子どもの送り迎えや部活の応援、そして家事と毎日忙しく過ごしています。そんな中、毎晩家事を終わらせてから、子どもと過ごす”ゆっくりタイム”を持っています。絵本を読んだり、その日の園での出来事を聞たりします。子どももその時間を楽しみにしていて、夕ご飯の片付けも手伝ってくれます。この時間を楽しむことで、その日の仕事の疲れも忘れ、明日も頑張ろうという気持ちになります。」とのことでした。

毎日忙しく仕事をしている大人と、自分のペースで確かめながらゆっくりと経験を重ねていく子どもたち。無理に大人のペースに合わせようとすると歯車が合わなくなり、お互いが苦しくなっていきます。子どもたちは一人一人が違ったペースで成長していきます。このお母さんのように、子どもに向き合うゆったりとした時間を作っていくことで、子育ての喜びや楽しみも倍増していくのではないでしょうか。

4月に入園･進級した子どもたちと過ごしてひと月がたちました。好きな場所を見つけたり、先生や友だちと過ごす中で、少しずつ落ち着きを見せてきました。お母さんがいなくてももう大丈夫！自分なりに遊びだしています。それぞれ違う家庭から集まってきた子どもたちの集団ですので、園では毎日ハプニングの連続です。 別個性の集団が互いにに刺激をもらいながら過ごしています。様々な経験を通して、友だちとたくましく遊べる子どもに育ち合ってほしいものです。

そんな子どもたちの毎日を応援し、私たち自身も子どもたちからパワーをもらって、豊かな生活を創っていきましょう。

園　長

あそび　―子どもが育つ大切な糧―

園庭に咲き誇る花々の彩りがきれいです。月見草、パンジー、ニオイバンマツリ…。枝いっぱいに薄紫の花を付けたセンダンの枝の間から、優しい木漏れ日が園庭に注いでいます。

私事で恐縮ですが、二十数年ぶりに赤ちゃんの泣き声で目覚める日々をおくっています。生まれた孫が中心にいる生活を家族全員で楽しませていただいています。空腹で泣けば乳を与えられ、おむつが濡れて泣けば替えてもらい、むずがれば抱いてもらい、その度に慈しみ深い言葉が降り注がれる。当たり前のことですが、こうした愛着形成（特に母親の）が、基本的信頼関係を創っていくのだと実感させられました。

子どもが様々なことを体験し、身につけていく過程を学習と言いますが、その学習の基本は、「遊び」によって獲得されるとされています。幼児期における「遊び」とは、まず、好奇心や探究心に基づいた自発的なものだと言えます。そして、何かに役立つという意識を持たない、楽しくおもしろいものであるはずです。子どもの活動と生活の原点とも言える遊びは、心や体の発達に加え、社会性、情緒面、耐性や達成感を育てるものです。遊びを通して、運動能力を高め、縦横の年齢との仲間関係を築いていきます。いろいろな情緒的体験の中で、表現力が増しイメージが広がっていきます。一人遊びから始まり、ごっこ遊び、見立て遊びとなり、自らルールを作り知的な活動へ発展していくわけです。我を忘れて遊び込む経験こそ、非認知能力（目に見えない人として大切な能力）を高める糧となるのではないでしょうか。遊ぶ仲間、遊ぶ時間、遊ぶ空間。失われつつある三間をしっかりと担保できる環境を整えることが、私たち大人の大切な役割だと思います。『遊びをせむとや生まれけむ』子どもたちのために。

何よりも保護者の皆さんが、お子さんのありのままをしっかり受け止めてくださる安全基地であることを願います。「泣いてもいいんだよ！」「いっぱいあそんでおいで！」と送り出してくだされば幸いです。子どもによっては、そろそろ疲れが出始める頃です。連休をご家族で楽しまれながら、どうぞ十分な休養もお願いしたいと思います。梅雨時を元気に乗り越えるためにも、毎日の変化に応じた対応や食事・睡眠に留意し、保護者の皆様のご協力をいただきながら楽しい園生活を支えていきたいと思います。

学園長

大豆生田啓友先生の
「子育ての悩み解決　１００のメッセージ」より
「子どもの発達について」

子どもの育つ力を信じましょう。子どもには自ら育とうとする力があります。そして、一人ひとりがそれぞれのペーススで育ちます。

１）発達には個人差や個性がある

子どもの発達を見ていると，そこには個人差があることがわかります。身体の大きい子、小さい子。かけっこが早い子、遅い子。早く文字が読める子、ゆっくりな子。あらゆる点で個人差があります。この個人差はこの先もずっとそうとは限りません。これまで全く文字が読めなかった子が急に関心を持ち、あっという間に読めるようになることだってよくあります。むしろ、そうした子が逆に本好きな子になることだってあるのです。また、興味を持つことにも個性があります。踊るのが好きな子、絵を描くのが好きな子など、さまざまです。私たちはまず、この個人差や個性があることを受け止めなければなりません。

２）発達には段階がある

よく発達段階などと言われます。人が発達するうえでは、その年齢や時期にふさわしい経験や内容があるということです。一方で、私たちのまわりにはそれとは異なる情報も氾濫しています。早くから読み書きなどを教えれば、ほかの子よりも早くその面を伸ばせるなどの情報です。しかし、一時的には効果があっても、長期的に見れば必ずしもそうでないことも多いようです。乳幼児期は、これから長い人生を生きていく「根っこ」をつくる時期だといわれます。ですから、親との信頼関係をつくることや、人とのかかわり方を学ぶこと、遊びの中でさまざまなことに興味関心や知的好奇心を持つこと、心やからだをたくさん動かすこと、感じたことを表現する経験などが大切にされています。それが、生きる力や学ぶ力の根っこをつくり、後伸びする力を付けるとも言われています。先回りせず、この時期にしかできない経験を大切にしたいものです。

３）子どもには自ら育とうとする力がある

大人は、しつけ、教えることで子どもがよりよく育つと考えます。もちろんそうなのですが、実はそれ以上に、子どもが持つ「自ら学び育とうとする力」のほうが影響があると、多くの研究で明らかになっています。赤ちゃんが、教えもしないのに数年で多くの言葉をしゃべるようになることからもそれはわかりますよね。子どもは日常の遊びや生活を通して、周囲の環境から多くのことを学び取っているのです。

子ども自身が持つ自ら育つ力を信じ、その育つ力のすばらしさに気づけることが、子育ての喜びであるのだと思います。

大豆生田啓友（おおまめうだ　ひろとも）先生
玉川大学教育学研究科教授
子どもと保育総合研究所研究員